

平成25年度成果報告書

I. 業務の内容

1. 業務の題目

「新しい科学コミュニケーションの探索」

2. 担当フェロー

佐倉 統

内田 麻理香（アソシエイトフェロー）

3. 当該年度における成果

①科学コミュニケーションの概念整理と枠組みの展望

a. 多様な科学コミュニケーションの俯瞰と整理

- ・科学コミュニケーションの多様性を総覧して比較するため、さまざまな特徴をもった科学コミュニケーション活動の実践や運営に焦点をあて、サイエンスアゴラ 2013 にて「伝わりすぎて、ごめんなさい。『科学技術のあたらしい伝えかた』」の企画・計画と、当日のファシリテーションを行った。
- ・プレゼンターは、福地健太郎氏（ニコニコ学会β、明治大学）、斉田智明氏（ブリティッシュ・カウンシル）、永山國昭氏（生理学研究所）、Patrick Newell 氏（TEDxTokyo）。

b. 理論的枠組の構築

- ・①aの活動を踏まえつつ、科学コミュニケーション活動を、個人や団体のコミュニケーションのレベルだけで検討するのではなく、社会の制度、歴史、文化の文脈の中で相対的に位置づけ、日本における科学技術の専門家と一般社会との関係を考察する作業を行った。その結果はまだ考察途上ではあるが、明快な意思決定と責任の所在を欠く社会風土（丸山眞男氏の言う「総無責任体制」）の中でさまざまな専門的知見が、その都度都合良く消費され、使い回されてきた歴史があり、福島第一原子力発電所に至るまでの原子力関連分野の状況も同列であることを明らかにし、著書（『「便利」は人を不幸にする』新潮選書、2013）にまとめた。

②新しい科学コミュニケーションの具体的なトピックの探索と調査

a. 事例研究

- ・昨年度までも、トピックの探索とインタビュー調査を実施したが、従来、必ずしも「科学コミュニケーション」活動としては注目されていなかった具体的な活動事例として、ニコニコ学会βを取り上げた。これは、《科学×エンターテインメント》の成功例であり、その仕掛け人のひとりである江渡浩一郎氏（産業総合研究所）へのインタビュー及びニコニコ学会βの参与観察を行った。

b. 儀礼的コミュニケーションモデルによる具体例の分析

- ・これまで「科学コミュニケーション」として注目されていなかった具体的な活動は、既存の科学コミュニケーション理論では、十分な分析や解釈をすることができない。そこでまず、海外及び日本で起こっている欠如モデルと一方向モデルの混同を整理し、その上でシャノンとウィーヴァーの伝達的コミュニケーションモデルとは異なる、アメリカのコミュニケーション研究者ジェームズ・ケアリーによる儀礼的コミュニケーションモデルに依拠して新しい科学コミュニケーションモデルを構築した。このモデルは「つなげる」コミュニケーション、つまり本ユニットの目的のひとつである、サイエンスの興味の潜在層の発掘という目的に沿っている。

- ・このモデルを枠組として、《科学×アート》の事例（工藤健志氏（青森県立美術館）へのインタビュー [平成 24 年度実施]）と《科学×エンターテイメント》の事例（江渡浩一郎氏（ニコニコ学会β、産業総合研究所）へのインタビュー）を分析し、KJ法によりキーワードを抽出した。また、内田アソシエイトフェローが実践している「家庭総合科学研究所（カソウケン）」の拡大のための事前作業として、この活動も儀礼的コミュニケーションの枠組みで再解釈した。